丈夫の妻とおもへど身にしみて
さびしと思ふ夜半もありけり

折にふれて外一首

和歌子

あかねさす日の本をのこはことりて
しでくさの露はらふをゝしさ

櫻田のあたりにて
さゝなみに幾すぢ長くあとを見せて
のとけく遊ぶ鴨の一むれ

出征の前夜　外三首

ひむかし

出征の前夜
孤燈の影にさやをはらうて丈夫が
はゝえむ姿ものすごさかな

夫の門出を人に知らせんとて
あられ飛ぶ西伯利亞の原に我夫は
今日いさましく門出でましぬ

戰死者の妻に代りて
國のためさゝげし露の命ぞと
思ひつゝ尙ぬるゝ袖はも

從軍者に代りて
西伯里亞の千里の原を我が行けば
吹雪顏を打つて軍馬嘶く

梅と雪

すみれ

みるとしもなき中空の
月は鏡のくもりなく

冴えてさむさのたへがたに
またなつかしき埋火の

あたり圍める五人みたり
春の野に出でゝとうちとけて
歌留多の聲のあたゝかに
いつしか更くる白梅月夜

軒がては近き曙の
薫りゆかしき書院の窓
まばらに見ゆる遠近を
いづこか雪のかゝり來て

白き光の心地よく
折柄うたふ雀うぐひす

さむき顏さへつゝましく
軒端に囀づる鄙曲の

折も何やらむはりあげて
ひとりをちゝと笑ひつゝ
情けでゝろもまだ知らで
寒さをかこつ子供等の

かわゆき歌の節とりて
まだ調はぬ春さむの
絃にひゞくか雪の梅
上枝下枝に飛び交ひて

世に怠りの人の夢
羽風のそれの音立てゝ

しどろもどろにおどろかす
あしたのさまのをかしかし

よろこび

幽香

學校へ行くのが嬉しくて、別れを何とも思はぬのは子供等で、さすがに三年間可愛がつた我には涙なしては居られなかつた、が、今は早十年の昔となつた、彼等は皆中學四年になつて居るとよ。同し年頃の子供見ては彼等の上思ひ出し、嘸大きくなつたらう、昔の面影今も殘つて居やうか、あの子の性質は如何に、われは望があつたが、などゝ、忘れもせぬに機會がなくて、とう〳〵十年相見なかつたのである。

をしの夏であつた、嬉しい手紙が我旅先へ來た。それは子供等同級の者十三人舊情を温ためたいから一度遇いたいといふのであつた。扨はまだ覺えて居つたか、誰の思ひつきでこんな可愛いことするかと、嬉しさ何ともいひ樣がなかつた。

此間の土曜日はいよ〳〵其日であつた、不忍池のほとり何ともいへぬ眺望のよい家で。道すがら子供の名前繰り返しては幼き顏思ひ出しいたづらの烈しかつた子供の事やら、困らせられた子供の事やら、いろ〳〵記憶から呼ひ起して道を急いだ。玄關には無骨な靴のほこりだらけなのがズラッと列んで居る、扨は皆來て居るよ、と何ともいへぬ心持！坐敷へ通れば、此家の子供の母出て來て、子供が世に出て始めての三年間、如何に苦勞をかけたか、よくまあ來てくれた、此樣な珍らしい嬉しい會はないとて喜ぶ。奥へ導かれて、さあ、こ